



運動を契機に廃線を免れた
福島県の地域の足

田村青年会議所と 磐越東線

写真／蒲生芳樹



#03

なくしてたまるか“磐東線” 度胸が生んだ路線存続の一手

お話を聞いた方

宗像哲夫
（田村青年会議所
第3代理事長）

勝山修二
（田村青年会議所
第42代理事長）
※敬称略

福島の2大都市である郡山市とい
わき市を結ぶ磐越東線。里山や
田園風景を走り、阿武隈高地を越える
このローカル線は「ゆうゆうあぶくま
ライン」の愛称で親しまれています。
地域住民にとっての重要な足である路
線ですが、現在では乗客数の減少など
から、その存続が危ぶまれています。

磐越東線は、国鉄が膨大な赤字を抱
えた40年前にも廃線の危機に瀕した
ことがありました。当時、路線の危機
に立ち上がったのが田村青年会議所の
青年たち。「なくしてたまるか“磐東線”
というフレーズを掲げて、存続を訴え
る運動に乗り出しました。

運動の中心となったのが、設立メン
バーの一人である宗像哲夫先輩です。
「私が考えたのは、交通問題への関心
を高めるシンポジウムでした。国鉄経
営陣の常務理事を呼べば大きな話題に

なるだろうと意気込んでいました。し
かし、当時の国鉄常務理事は国の首相
にも匹敵する雲の上の存在。町村の首
長や鉄道関係者からは、『縁のない田
舎まちに、そんなお偉いさんが来るは
ずがない』と一向に取り合ってもらえ
ませんでした。それならば、国鉄本社
に直談判しようと思ったんです」

1984年、期待と不安を胸に東京丸
の内の国鉄本社を訪ねた宗像先輩。常
務理事の須田寛さんが現れると、「磐
越東線の赤字の根拠を教えてください。
私たちは乗って残す運動をしたいんで
す」と思いをぶつけます。前向きに解
決策を探りたいという若者の熱意に理
解を示した須田さんは、シンポジウム
への参加を承諾。誰もが無謀だと思っ
た国鉄常務理事の招待を、宗像先輩は
度胸と熱意で取り付けたのです。

三春町公民館で行われたシンポジウ

ムは立ち見が出るほどの大盛況となり
ました。それから地域では駅直結の集
合住宅や施設の建設が始まるなど、駅
利用者拡大の取り組みが立ち上がって
いきました。シンポジウムの翌年には、
ダイヤ改正によって一部区間で運行本
数も増えています。路線を実際に使っ
ている人たちがいかに自分ごととして
捉え、行動するか——。磐越東線は運
動を通して地域の意識を変えたことで、
廃線の危機から逃れたのです。

現在、再び岐路に立たされた磐越東
線。現役メンバーは、自らが乗ってそ
の魅力を再確認し、沿線で地域の食や
伝統に焦点を当てた「愛郷祭」を開催
するなど、利活用を促進しています。
乗って残す——。田村青年会議所の創
成期に宗像先輩らが掲げた思いは、
脈々と受け継がれ、地域のあらゆる人
を巻き込みながら着々と育っています。